

類想か本歌取りか

林 翔

今日は正月三日、今泉宇涯の雲遊亭における連句始めの日である。立句を所望されていたが、今年は「三日」を季題にした立句をと思いながら、気に入った句が思いつかないままに、ふと机辺の歳時記をあけてみる気になった。一番手近にあったのが山本健吉編の『最新俳句歳時記』。解説は二行で例句は二三句載せてあるが、三句の中に、

三日 早や暮れて月澄む門辺かな 浪江女
三日 はや雲おほき日となりにけり 万太郎
三日 はや峽のこだまは炭曳くこゑ 楸 郁

と、上五の同じものが三句あった。新年の句会に出席すると、「三日はや云々」という句にはいやというほどお目にかかるのだが、誰でも思いつくことは同じようなものなのだろうか。あるいは歳時記にあるから真似るのだろうか。それにしても一冊の歳時記に三句も「三日はや」があるとは思ってもいけなかった。浪江女という人は知らないが、万太郎・楸郁といえは第一流の俳人であるから人真似をするとも思われず、やはり類想の危険というものはそこらへんにごろごろしていると言わなければならないだろう。

うな句が出た。

夏蝶の目まぐるしけれ薔薇を剪る

貞の句を知っている人は一様に眉をひそめたのだが、作者は何と、「馬酔木」の古参作家で当時は同人になっていたT（今は故人であった。いやしくも「馬酔木」同人たる者が、先輩同人の作品とほとんど同じ句を、意識して作るはずがない。同じような句がすでにあると知っていたら、秋櫻子指導の句会に出すはずはないのである。貞の「夏蝶」の句は彼の意識の底に潜んでいた。彼が庭の薔薇を剪ったとき、夏蝶の舞いが目に入った。咄嗟にこの句ができたのだが、この「咄嗟」というのが曲者である。意識の底に潜んでいた貞の句が咄嗟に意識の表層に浮かび上がった——だから「目まぐるしけれ」という表現形態まで同じになってしまったのだが、彼はそれに気がつかなかった。

巧い表現があまりにもすらすらとできてしまったときは、「待てよ」と自戒しなくてはいけないのだ。私にも同じ経験は何度もある。ただ、句会に出したり雑誌に投稿したりする前に「待てよ」と首を傾げ、それから類句があったことをやっと思ひ出して、取り消したり発想のし直しをやったりしたから、幸いに恥をかかずに済んでいるのである。

次に、強烈な主観によって成す句の場合はどうであろうか。

雪嶺の裏側まっかかも知れぬ 今瀬 剛一
第二句集『約束』昭和五十三年の作。『約束』の発刊は五十四年四月であるが、五十五年の俳人協会主催全国俳句大会で、

涅槃図の裏側真つ赤かもしれぬ
という句が、朝日新聞社賞と第十九回全国俳句大会賞とを獲得し

Y文化センターでの講義のあと、恒例のお茶の席で一人が口を切った。「この間、ある雑誌で私の句と全く同じ句を見つけてびっくりしちゃったんです。私のは二、三年前に『沖』に採っていたいた句なんです。それと助詞の使い方で全く同じなんです。名詞一つだけ入れ替わっているんですが……」と言う。二、三年前の彼女なら全くの初心者。その句を雑誌から拾い出して真似る人もあるまいがと思ひながら先を聞くと、彼女の句は、

禪 寺の 茶 一 色 の 布 団 干 す

で、彼女が見つけた他人の句は、

禪 寺の 紺 一 色 の 布 団 干 す

であったという。「禪寺や」と言わずに「禪寺の」といったところまで同じなので彼女が気に入ったのだろうが、これは偶然の一致というものであろう。客観写生の句では、同じ物を見れば同じような句ができるのは当然のこと、時には助詞の使い方で一致してしまうというのもありうるのだ。

それでは、やや主観を加えた写生句ないし日常句では、どうであらうか。

夏蝶の目まぐるしけれ花を切る 及川 貞

処女句集『野道』昭和九年の作。貞が初めて俳句会というものに出てみたのが昭和八年の夏だから、句作を始めて満一年目ごろの作である。夏蝶の舞いを目まぐるしいと感ずるのは、主観とはいっても特異なものではない。花鉄で庭の草花を切るとき、それにまつわるような夏蝶を目まぐるしいと思った、その状況でこの句は生きている。

ところが、昭和二十年代かと思うが、「馬酔木」の例会に次のよ

た。作者は愛媛県N氏。作者としては坎しいことがないのだから名前を伏せてもらいたくないと言いかもしれないが、剛一の句と比べて「雪嶺」と「涅槃図」が入れ替わっているだけである。これについては剛一の師である能村登四郎が俳人協会に申し入れをしたが、盗作の証拠はなく偶然の一致かもしれぬということで、授賞取消しには至らなかった。もしN氏の平生の作風がリアリズムばかりなのに突然変異的にこの句ができたとしたらたいへん怪しいことになるが、協会としてもそこまでの調査はできないから、余儀ないことであつた。

この両句について検討してみると、同じく「かも知れぬ」という想像をしていても、剛一の句は極めて自然である。日没後の雪嶺ならば裏側が真つ赤ということはありうる。ありうるけれども目には見えないから想像する。そしてこういう想像を詠んだ句はそれまでになかったから、読者はその意外性に打たれるのである。

「涅槃図」の句は極めて不自然である。釈迦の入寂を悼み悲しむ気持ちに対して、どうして真つ赤という強烈な色が出てくるのか理解に苦しむ。不自然、不合理であるからこそ、意外性は剛一の句よりも更に更に強い。前例として剛一の句があることを知らなかった選者がその意外性に対して高点を与えたのも、当然の成り行きであつたろう。

この句が創作であるか盗作であるかはともかくとして、一般に、強烈な主観によって成す句は、純然たる客観写生の句に比べて、偶然の一致ということの確率ははるかに低いはずである。

ただ、前掲の「夏蝶」の句のように、意識の底に眠っていたものが不意に頭をもたげることが、強い主観の句でもあり得る。その強

烈な主観が抜き差しならぬものである場合は、たとえ表現において類似の句が前にあったとしても変えようがない。誰でも思いつく有名な例で、鷹羽狩行氏も「類想句と類似句」(84年版角川『俳句年鑑』)で取り上げていたが、

降る雪や明治は遠くなりけり 草田男
は、八瀬祭忌明治は遠くなりけりVという芥子の句が前にあったとしても、秀句として動かない。

私は「沖」五十八年十二月号の同人作品評で、

定年は霧の奥くる 船の音か 渡辺 昭
という句を取り上げて、

▲「霧の奥くる船の音」はまことに古典的な風景だが、作者はこれを現実的な「定年」と結び付けている。サラリーマンにとって定年とは、何時かは必ず訪れる厳しい現実だが、「何時かは」という距離感が、霧の奥をかすかに近づいてくる船の音という心象風景に置き換えられた。V

と評した。もちろん私は、類句があることは全然知らなかったのである。すると「沖」の一会員から手紙が来て、飯田龍太著『龍太俳句鑑賞』の中で取り上げられている句、

老ゆるとは夜霧の奥の 船の音か 網代錦泉子
と似ていすぎる、偶然の一致だとしても渡辺氏のために惜しむという意味のことが書いてあった。手紙の主は老境に入った医師で、錦泉子の句に深い共鳴を覚えていたのだという。島住みのこの医師にとって、船の音も現実感をもって迫るものであったに違いない。

昭の意識の底に錦泉子の句があったのか、それとも全くの偶然で一致したのか、私は昭にたずねてみようとも思わない。前掲「涅槃

図」の句のような不自然さ、不合理さは微塵もないばかりか、強い現実感をもって迫る点において、むしろ「降る雪や」の句のほうに近いと思うからである。壮年のサラリーマンである昭はそろそろ定年を意識し始めるのが自然であるし、また昨秋私と共に柳川に遊んで河童舟の船の音を共に聴いた仲でもあった。

錦泉子の句もいい句だが、昭のは更にいい句だから問題ないと、私は、島の老医師に書き送ったが、句の優劣は鑑賞者の主観に任せよう。具体的には、錦泉子の句は「老ゆる」に対して「夜」が利いているし、昭の句は「定年」に対して「くる」が利いている。

山上樹実雄の第一句集『真竹』(昭49)が俳人協会賞の有力候補になっていたとき、審査会の席上で、

こころの帆を張る 炎天のしづけさに
の句が誓子の、

炎天の遠き帆やわがこころの帆

からの借り物の句だという、一審査員の一言でたちまち失格した。『真竹』は今読み返してみても実にすばらしい句集で、ただこれ一句のために受賞を逸したのは実に惜しいと思うのだが、逆に言えばただの一句でもゆるがせにしてはならぬということであろう。誓子の句は誰でも知っているあまりにも有名な句だから、樹実雄は皆が知っていることを承知のうえであえて「本歌取り」を試みたのだと、私は善意に解釈してみたが、「しづけさに」の五字だけでは本歌取りは成功しない。俳句で本歌取りをするのは難事だと、その後私は自作のうえでも痛感した。

私の書斎の窓から見える雑木林の一面は竹が茂っている。その間から雑木の枝がさし出ている。秋深くなると、竹林の隙間からさし

出た雑木の枝だけが紅葉を見せるわけだ。私は水原秋櫻子の晩年の名句、

竹外の一 枝は 霜の 山 椿

を想い出していた。そして「竹外の一 枝」だけを借りた本歌取りをしてみようと思った。秋櫻子のは風景句であるから、心象句にすれば本歌取りの目的は達せられると思った。

竹外の一 枝の 紅葉 物 言 ふ か 翔

が、それであるが、心象句として成功しているとはとうてい思えない。本歌取りが失敗したわけである。「ちくがいのいっし」この八音をそっくり使おうとしたのが失敗のもとであった。樹実雄の炎天の句がもし本歌取りの失敗作だとすれば、「こころのは」「えんてん」合わせて九音をそっくり使おうとしたことに失敗のもとがあるだろう。

芭蕉は本歌取りを好んだ。

世にふるもさらに時雨の宿りかな 宗 祇
によって、

世にふるはさらに宗祇の宿りかな 芭蕉
と詠んだのはその極端な例であるが、『奥の細道』に例を取っても、武隈の松での句、

松より松は二木を三月越シ

は八武隈の松は二木を都人いかにとばみきと答へむV(橋季通)によっている。

蕉門では曾良が本歌取りの名人であった。芭蕉が松島で句を詠んだにもかかわらず詠めなかったことにして、『奥の細道』では、

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

だけを載せているが、八身にぞ知る真野の入江に冬の来て千鳥もかるや鶴の毛衣V(祐盛法師)の本歌取りで、しかも本歌よりすぐれていることに感嘆し、自作を載せるのをためらってしまったのであろう。

塚本邦雄によって『新古今和歌集』が再評価されたとき、私は本歌取りの再評価も考えたのだが、現代俳句における本歌取りは今後の課題と言えそうである。

主宰
上村占魚

みそさざい

提唱 器用に流行に先走ったり、人の口真似をしたり、軽薄に気取ったり、

▷新会員歓迎◁
会費(誌代送料共)
一年 6000円
半年 3000円
見本誌300円(切手可)

みそさざい社

東京都東村山市萩山1-10-25
振替東京4-134286 〒189

本当らしい嘘をいったりしないので、平易な国語で純粋な気持を詠うよう心がけましょう。